2018年度筑波大学博士（社会科学）学位請求論文　要約

人文社会科学研究科　国際日本研究専攻

馬　文甜

国境を越える高度人材の研究
―中国人の日本留学及びキャリア・家族形成に関する分析―

本論文全文のインターネット公表を延長する理由は、博士号取得の際に提出した博士学位請求論文『国境を越える高度人材の研究―中国人の日本留学及びキャリア・家族形成に関する分析―』の全部が、株式会社ココ出版（東京都新宿区袋町 25-30-107）より単行本の形で刊行されるためである。本件については、2019年5月中に入稿し、2020年春の刊行を目指している。

今日、先進国をはじめ、世界各国において人材獲得競争が激化している。北米や欧州各国、オーストラリアなどの先進国では、高学歴と科学技術分野を中心に専門的資格を有する外国人を積極的に受け入れている。これらの国は総じて、世界各国から優秀な人材を惹き付け、科学技術などの革新を有利に推進してきた。一方で、中国などの発展途上国は、経済発展を成し遂げるため、自国の人材育成や強化はいうまでなく、外国籍人材の誘致も積極的に取り組んでいる。

日本は、小渕政権から「高度外国人材」の導入が政策目標として挙げられるようになり、2008年に日本政府は高度人材の受け入れ拡大の方針を固めた。2012年から、日本は諸先進国にならって、「高度人材ポイント制による出入国管理上の優遇制度」を導入している。2014年には、研究者やIT技術者、経営者などを対象にした「高度専門職」という在留資格を新設した。さらに2017年4月から、研究者や企業経営者など高い資質と能力を持つ外国人が１年で永住資格を取得できる世界最速級の「日本版高度外国人材グリーンカード」が始まったのである。

日本を含む世界主要国において、高度人材に占めるプレゼンスが大きいのは、中国人である。2016年末、日本における外国人の受入数において、中国人は1位である。「技術・人文知識・国際業務」、「高度専門職」、「経営・管理」などの在留資格を持つ高度外国人材のなかでは、中国出身者はいずれも半数近くか、もしくは半数以上といった割合で構成されている。高度人材の予備軍とされる「留学生」も同様である。そのため、中国出身者

を理解することが、日本における外国人への理解を深めることに繋がると考えられる。日本だけでなく、世界で中国人高度人材、中国人留学生の存在感が増している。アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの主要国において、中国人留学生はいずれも1位を占め、2位の国と差をつけているのである。

その一方で、世界最大の人材送出国ともみなされる中国においても、人材への注目度が一段と高まっている。中国政府は、「人口大国」から「人材強国」へという戦略を本格化させ、海外で活躍する中国人高度人材を呼び戻すための政策を積極的に展開している。戴（2012）は、帰国した高度人材が、中国における科学技術の革新を担う欠かせない存在であると指摘している[3]。21世紀に入り、中国から海外へ留学する学生は増加しているが、同時に、中国経済の発展が留学生の帰国を促進しているのである。王ら（2013）は、近年の帰国留学生数の推移から、2019年までに、帰国留学生が、中国から出国する留学生の数を上回ると予測している[4]。

こうした状況を踏まえるならば、日中間の所得格差や政策の展開などマクロレベルの動向を理解することは重要である。しかし同時に、高度人材にとっては、先進諸国の近年における政策・法制度の変更により、国境を越える移動が以前に比して容易になっていることに留意したい。越境がしやすい今日においては、人の移動・移住という決断に、キャリア追求と家族形成という人生の重要な局面での思慮や実際の振る舞いが不可避的に結びついていることに注目すべきである。つまり、個々人の意識や行動原理というミクロレベルで、高度人材の越境はどのように規定されるのだろうか。

本研究は、移動・移住のプロセスにおいて、キャリアの展開と家族の形成はどのように位置づけられ、人の越境という行為選択に影響を及ぼすのか、日中を越境する中国人高度人材の事例を通じて明らかにすることを目的に執筆された。具体的に、留学または帰国を思うきっかけ、その実現に至るプロセスはいかなるものか。どのようなキャリア志向を持っているのか。今後のキャリア形成をどう考えているのか。20 代～30 代前半の国境を越える中国人高度人材の家族形成は、いかなる考えにもとづくのか。本研究は、これらの問いを明らかにした上で、高度人材の越境とキャリア・家族との相互的な影響を考察した。

本研究は序章と終章を含め、全部で 8 つの章から構成されている。第一章から第三章までは、先行研究や文献資料を分析し、議論している。第四章から第六章までは、本研究で実施したアンケート調査、インタビュー調査の結果に基づいている。以下では、各章の要旨を述べた上で、結論を記述する。

1. 要旨

序章では、本研究の研究背景、目的と意義を述べている。その上で、本研究の研究方法と視座を提示している。本研究の意義は、第一に、越境する就労者や家族が増加するなかで、国境を越える人の移動の背景、過程、帰結を明らかにしようとする移民研究には、キャリアや家族という要素を取り込んだ考察が求められる。本研究は、高度外国人材の越境を理解するための学際的解釈を試みるなかで、キャリア追求と家族形成の局面を射程に収める。第二に、これまで比較的に多く議論されてきたマクロレベルの要因のほか、本研究はさらに、高度外国人材の内面的な意識に主たる焦点を合わせている。高度な教育を受けた中国人の国際移動は、従来の単純労働者の移動を説明する高所得や雇用機会の拡大などの構造的な要因では解釈しきれない部分があると考えられる。第三に、本研究は、移民研究の対象として無視できない中国人高度人材に絞っている。21 世紀に入ってから、中国人の越境は一方通行でなく、中国への還流も注目されるようになっている。本研究は、中国人高度人材の海外への移動と母国への帰国、双方の移動に着目していることにも、特徴がある。

本研究の研究方法は、文献調査、アンケート調査、インタビュー調査である。文献調査では、人の国際移動、キャリア、家族に関する先行研究、日中両国の高度人材に対する誘致政策の変遷、受け入れの現状についての政府報告書、行政文書、公式統計を読み込みを中心に収集し、分析している。

アンケート調査は、中国人留学生（元留学生を含む）を対象とし、2014 年 9 月に実施されたものである。総計 350 人分のデータを集めている。インタビュー調査は大別して 3 回に分け、調査対象者の合計は 51 名である。インタビュー調査Ⅰは、2013 年 6 月～9 月にかけて実施し、上述のアンケート調査を補足するものとして位置づけられる。アンケート調査およびインタビュー調査Ⅰは、在籍中の中国人留学生を中心とする意識調査であるが、インタビュー調査Ⅱとインタビュー調査Ⅲでは、さらに焦点を絞り、修士学位以上を取得した中国人高度人材を対象としている。インタビュー調査Ⅱは、2016 年 9 月～2017 年 3 月にかけて、日本在住の中国人高度人材を対象とした調査である。インタビュー調査Ⅲは、2017 年 3 月～5 月にかけて、日本留学の経験を持つ中国帰国者を対象に、電話にて個人調査を実施したものである。

第一章では、人の国際移動、キャリア、家族に関する先行研究の整理を行っている。第一節では、人の国際移動における主要なアプローチと理論を概観している。大きな流れで

整理するならば、経済学アプローチ、歴史・制度的なアプローチ、移民システムや移民ネットワークの機能を重視する学際的アプローチとして整理できる。第二節では、本研究の研究対象を包括する高度外国人材の国際移動を議論する先行研究をまとめている。実際、高度人材の国際移動に関する先行研究をみると、確かに様々な角度から、高度人材と呼ばれる人々の国際移動の理解が進んでいる。ただし本研究が着目する中国人高度人材に関しては特に、国際移動の主体である高度人材の内面的な意識に着目する研究が、総じて、体系的にまとめられているとはいえない状況にある。つまり、これまで実証的な分析を通じて十分に結びつけられてこなかった越境とキャリアの関係、そして越境と家族の関係を含める必要がある。

第三節及び第四節では、それぞれ移民研究のなかで取り上げられるキャリアと家族に関する議論を考察し、先行研究からの知見を検討している。本研究としては、国際人口移動の現象の異なる側面を考察することの重要性を鑑み、学際的な解釈を行うことの必要性を強調するとともに、移民の主体的の動機やその多様性、キャリアという要因や、家族あるいは世帯といった単位を分析の視野に入れることを積極的に試みたい。

第二章では、中国人の海外留学の歴史を振り返りつつ、現代に生きる中国人の外国への留学および母国への帰国の現状、そして、その背景としての中国の経済社会を考察している。第一節では、清朝末から、中華人民共和国建国まで、そして建国後から 21 世紀前までの中国人の海外への留学の歴史、各時期の留学政策を概観している。近代中国人の海外留学は、1872 年に清朝政府がアメリカへ官費留学生を送り出したことから始まった。それ以降、政権交代、戦争、内乱、文化大革命などが起こったにもかかわらず、100 年以上の年月に渡り、留学生を送り出し続けてきた。日本への留学生派遣は 1896 年の 13 名の清国人留学生から始まり、中国にとっての重要な留学先国であり続けてきた。第二節では、21 世紀以降の中国人の海外留学の状況を取りあげている。本研究の焦点の一つである現代の中国人留学は、私費留学が 92%の割合を構成している。中国の経済発展による収入水準の上昇や一人っ子世代への熱心や教育熱の高さなどがその背景であろう。送り出し側の家庭は富裕層から一般の家庭へ広がっており、日本は、英語圏の諸国に続き、依然として中国人にとっての重要な留学先である。

第三節では、帰国留学生の増加する現象を通して、中国で起こっている頭脳還流の現象に焦点を当てている。帰国留学生の急増の背景には、海外への留学生の急増化のほか、中国経済の成長が主要な要因であるといわれている。しかしながら、大都市を中心に帰国留

学生が急増するなか、帰国留学生の就職難が社会問題として注目を集めている。海外留学ブームが広がっているなかで、帰国留学生というだけでは簡単に評価されず、個人の能力や経験が問われるようになっている。

第三章では、高度外国人材獲得をめぐる日本と中国を含む主要各国の政策や制度を取り上げている。第一節では、アメリカ、イギリス、オーストラリア、韓国における高度外国人材に関する人材政策を概観している。高度な技能を有する人材を優先的に受け入れるという点で、各先進国の共通点である。第二節では、日本における留学生及び高度外国人材の受入れ政策、その政策の結果について検討を加えている。日本は、他の先進国よりも海外からの人材獲得において出遅れているといわれているが、現在では、高度外国人材と、そして少なくとも一部はその前段階にある外国人留学生の受け入れを拡大しようと、政策を展開してきた。

第三節では、中国における高度人材の呼び戻し、すなわち帰国奨励政策について整理を試みている。高度人材を選別的に受け入れる政策は世界各地で立案、実施されており、現代の国際社会では珍しいものではない。中国でも、国際競争力強化のための人材獲得の必要性が意識され始めたのである。とはいえ、中国と上記の先進国の立場は異なり、中国は、海外で活躍する同国の高度人材の呼び戻しにより多くの力を費やしてきた。まとめるならば、受入国と送出国の双方から獲得すべき対象とみなされている高度人材にとって、近年の各国による政策的な動きにより、移動・移住する自由度が相対的に高まっている。そうであるならば、そうした人々が実際に国境を越え他国に移り住むかどうか、また、帰国するかどうかの判断は、かつてに比べれば、個々人の意志や動機にもとづくということがいえよう。

第四章以降では、本研究で実施した調査に基づいて、越境する中国人高度人材の行為を、ミクロの視点から分析している。特に第四章では、在日中国人留学生の個人の属性と将来設計に着目した調査のまとめである。第一節は、本研究で行ったアンケート調査とインタビュー調査Ｉの概要について述べている。第二節は、アンケート調査の結果から、日本で学業を修めた後、帰国する、あるいは日本に留まる理由を分析し、中国人留学生の将来設計の類型化を行っている。中国人留学生の将来設計をパターン化すると、日本で学業を抑えた後は「日本滞在型」、「帰国型」、「第三国型」と分けることができる。さらに、「日本滞在型」については、永住資格を取得する意思によって三つのタイプに分けることができる。それぞれ、「非希望型」、「未定・不明型」、「希望型」である。

第三節は、調査対象者の中国における出身地、配偶者・恋人、一人っ子といった属性が、彼（女）らの将来設計に与えうる影響について考察を加えている。出身地の違いは、アンケート調査の結果からは確認できなかったが、インタビュー調査の結果からは、中国人留学生の将来設計に与えている可能性が否めない。配偶者・恋人の進路先国は、中国人留学生本人の将来設計に作用する。この作用には男女差は生じているように考えられる。20 代から 30 代前半という調査対象者の年齢層を考えると、就職や結婚といった人生における重大な事柄について、男女では優先順位が異なっていると解釈できる。一人っ子という属性については、一人っ子ゆえに母国の家族のもとに戻る意思が強く働くという先行研究や通説と一致しない結果が得られた。親の世話や家族との繋がりを理由に帰国を選択することは、一人っ子と非一人っ子が共通している考えである。また、一人っ子のほうは、その将来設計において、より強い独立性を持ち得るということが示唆された。

第五章は、日本に在住する中国人高度人材の事例を取り上げ、人の国際移動、そして国際移動と緊密に関連するキャリアと家族の問題を取り上げている。第一節は、インタビュー調査Ⅱの概要、調査対象者の概況について述べている。第二節は、中国から日本へ移動した動機、経緯について整理している。来日の動機や経緯について、具体的なきっかけは様々だが、大きく分けて、専門の勉強やキャリア形成といった理由と、家族を中心とする理由があるる。そして、日本が唯一の目的国であるか否かによって、必然的な来日と偶然的な来日ケースがある。インタビュー対象者のなかでは、中国の大学を卒業・修了し、留学生として来日したケースが多い。その背景には、中国の経済成長による世帯収入の増加や中国における「就職難」の問題が挙げられるであろう。

第三節は、日本に在住する中国高度人材のキャリア形成、家族形成、そして抱えているキャリアと家族の問題を考察している。日本でのキャリアの展開について、修了直後に、終身のポストに就職したものや、修了後に 2～3 年の任期付きポストを経て、終身ポストに就くものや、調査時に依然としてポスドク研究員として働いているもの、パート形態で働くものもいる。中国人高度人材の家族形成については、調査対象者のうち日本で家族を形成したケースが多かった。外国で家庭を形成し、キャリアを構築することは決して容易なことではない。また、調査を通して改めて裏付けられたのは、中国人女性の強い就労願望である。本研究の研究対象者のなかの女性は、自らのキャリアに対する希望と期待を強く持っているが、家族のために自分のキャリアをいったん中断せざるを得ない。一方、現在

勤務している女性にも、残業や仕事のストレス、共働きに伴う別居の問題など、深刻なワーク・ライフ・バランスの問題がうかがえる。

第四節は、中国人高度人材の国際移動の決定要因を分析し、人の国際移動におけるキャリアと家族要因の影響を明らかにしている。中国人高度人材の国際移動には、来日という行為を含め、それ以降も、キャリアの要因と家族の要因が顕著に現れている。中国人高度人材の越境にはキャリアや家族に関連する要因が作用しているが、同時に、越境という行為が、中国人高度人材のチャンスを広げ、キャリアアップや家族形成にも作用しているプロセスがみてとれる。以上の分析によって、中国人高度人材の内面的な意識を理解し、国境を越える高度人材について、人の国際移動、キャリア、家族といった面からの学際的な解釈を試みている。

第六章は、海外留学を経つ、中国に帰国した中国人高度人材について分析を行っている。第一節では、本章の分析の資料となるインタビュー調査Ⅲの概要について述べている。第二節では、帰国した中国人高度人材のキャリアと家族形成について分析している。考察より、キャリアと家族の要因が、中国人高度人材の海外への移動だけでなく、彼（女）らの帰国の意思決定に大きな役割を果たしたことが確認できた。キャリアの要因については、自分の能力をより発揮できる仕事は中国にあるといった理由で帰国した対象者は少なくない。今の収入の水準に満足せず、将来的な賃金上昇を望むという本音も聞かれる。このことから、キャリアの初期の賃金より、キャリアの発展や将来の賃金水準の大幅な上昇の見込みがあるか否かなどを重要視していることが窺える。

家族の要因として、中国にいる配偶者や両親が、中国人高度人材の帰国の意志決定に作用している。この点は、第四章の考察、すなわち、配偶者・恋人の進路先国は中国人留学生の将来の進路先国と有意に関連している点と同様である。

第三節では、帰国した中国人高度人材の将来設計に影響するキャリア志向や移民・移住に関する考えについて検討を加えている。就職を決める要因は、従来でいわれている待遇はここでも言及されるが、高度人材の場合、仕事の内容やキャリアアップのチャンスを提供してくれる組織であるか否かが重要視されている。現在の仕事に対する評価は、全体的に、肯定的に評価するものが多い。不満に思う点で共通することは、収入に対する不満足、仕事が忙しくワーク・ライフ・バランスが取れていない、といった事柄である。第四節では、中国人高度人材の留学、帰国の決定要因を分析している。考察により、キャリアと家族の要因が、中国人高度人材の海外への移動だけでなく、彼（女）らの帰国の意思決定に

大きな役割を果たしたことが確認できた。

2. 結論

今日、先進国をはじめ、世界各国において人材獲得競争が激化している。北米や欧州各国、オーストラリアなどの先進国では、高学歴と科学技術分野を中心に専門的資格を有する外国人を積極的に受け入れている。これらの国は総じて、世界各国から優秀な人材を惹き付け、科学技術などの革新を有利に推進してきた。一方で、中国などの発展途上国は、経済発展を成し遂げるため、自国の人材育成や強化は言うまでなく、外国籍人材の誘致も積極に取組んでいる。

本研究は、主に日本を舞台とし、中国人高度人材というグループを研究対象として取り上げ、彼（女）らの越境という行為の背景やプロセスを明らかにした。中国人高度人材の越境やそれに関連する行為、つまり留学や留学先での就労、定住、帰国等のライフサイクルには、否応なく、キャリア追及や家族形成が複雑な影響を及ぼしている。越境という行為そのものもまた、当事者や家族のキャリアや家族のあり方を規定しているという意味では、越境、キャリア、家族は、お互いに作用しあうものとして捉えなければならない。特に高度人材の場合は、一般的な国際労働移動よりもさらに、次節でも述べるように、キャリア追求や家族形成といった要因を重視すべきであろうと思われる。各国の政策や法制度が、彼（女）らの受け入れを容易にしているのであればなおさら、個々人の意識や動機が、移動・移住パターンを規定する上で、重要性を帯びてくるのである。

国際的な越境の一形態である海外留学という行為一つとっても、当事者の人生の描き方が現れている。留学の動機には、先行研究でよく言及される、「専門知識の勉強」や「視野を広げるため」だけではない。本研究の対象者に多い修士、博士学生修了者にとって、より高い学歴を求め、就職力を向上させるうえでも、海外への留学という選択肢が現れる。学歴が重視される社会である中国では、大学進学率の上昇につれ、大学卒業という履歴だけでは、就職時に優劣の差がつきにくい現状がある。「どの大学を出たか」、「留学の有無」、「留学先大学のランキング」などで差別化が図られるのである。

また留学には、社会人になることを先延ばしする目的もある。こうした「モラトリアム」に根差す行為は、まさに本研究の対象者に多く含まれる一人っ子世代ならではの意識ともいえよう。さらに私費留学生が 9 割を占める現状を鑑みると、家計に困らない家庭の増加や親世代が留学への支持がうかがえる。第二章で述べた中国人留学の歴史を振

り返ると、将来のキャリア構築の過程とみなされる留学や、就職の逃げ道としての留学は、現代に生きる中国人の海外留学の新しい特徴といえよう。

留学の動機が同一ではないように、中国人高度人材にとっては、海外での引き続きの滞在も母国への帰国をする動機も二元論的な決断ではなく、また、その動機は実にバリエーションに富んでいる。本研究は日本で留学している中国人留学生の留学後の進路選択に関する意識を調査し、その意識を「永住資格希望型」、「未定・不明型」、「永住資格非希望型」、「帰国型」、「第三国型」と類型化した。すなわち、高度外国人材は一枚岩の存在ではなく、出身国の文化や価値観、社会環境、個人の属性など、極めて多様な側面を持つ集団である。その意味で本研究は、越境する人間の心の持ちようの多様性、あるいは自由度を浮かび上がらせるものであった。留学生の受け入れ拡大を通じた高度人材の獲得を目指す日本にとってみれば、日本に残るか残らないかで迷う留学生たちの複雑な心情を理解することは重要である。このことは、中国側にとっても同様である。

本研究の対象者が集中する 20 代～30 代は、留学を一手段としてキャリア追求や家族形成と重なる年齢でもある。留学によりその後のキャリアが確定したり、あるいは、留学先で将来のパートナーに出会い、結婚に至るケースも少なくない。キャリアにおける日本と中国での相違点として、仕事を選別するうえでの主体性が異なる点に留意したい。中国に帰国した中国人高度人材は、就職の際に仕事の内容を最重要視している。一方、日本は、博士学位取得者であれば、就職時、仕事の内容について明確であるが、修士学位取得者にとっては、日本的な雇用慣行により、就職時の配属や仕事の内容が必ずしも明白ではない。つまり日本で就職する場合は、キャリア上の具体的なビジョンが相対的に持ちにくくなる。

異なる社会では、キャリア形成の考え方も異なるものである。終身雇用と年功序列が今も残る日本に滞在する中国人高度人材は、研究の環境・条件や、現時点の報酬等を評価し、日本社会で生きていくうえで、キャリアにおける安定が必要である。一方で、能力主義志向を持つ組織が多い中国では、より多くのチャンスとチャレンジが共存していると考えられている。帰国した中国高度人材は、日本に滞在するグループと異なり、全体的な環境よりも、個人が挑戦しうるチャンスや、将来の可能性の広がりを期待している。高度な専門知識・能力を持つ中国人高度人材にとって、より早い段階で昇進できる組織で働くことは魅力的に思えるであろう。顕著な経済発展を成し遂げている母国の中国に帰国することの魅力は、高い越境性を有する高度人材にとって、より高まっていくことが予測されるのである。

一方、日本に滞在する場合、その主な理由の一つとして、「勤務経験を積みたい」という動機が第四章で示された。日本での就職が、中国人高度人材のキャリアアップのステップとして位置づけられている。同時に、中国人高度人材は、日本で無任期の仕事が保証されれば、住宅を購入するものが多く、日本にとどまる意識が高まる。正規の職員として雇用されれば住宅ローンを組みやすいといった要因もあるが、キャリアに関わる状況の変化が、移動先に定着しようとする意識に影響している点が確認される。

キャリア志向も重要であるが、越境する高度人材にとって、従来いわれてきた賃金格差という要因は今も小さくない。しかし本研究では、所得水準という短期的かつ即物的な条件よりも、将来におけるキャリア追及に関する見通しや意識も強く作用していることを明らかにしている。高度人材は、専門性の発揮できる場所を求め、その能力を発揮できるポストを望む。そのポストの所在が、有力な移動候補先の条件になる。

どの国で働くか、ということは事前に決まっておらず、置かれた環境のもと、将来のキャリアの見通しの良いところに移動するという傾向も、本研究の調査結果からわかる。日本と比べ、中国の賃金水準はまだ低いことは否めないものの、中国の経済成長や物価の高騰による賃金上昇や、高度人材のため用意されるチャンスの多さを鑑みるならば、外国人高度人材を受け入れようとする日本にとっては、彼（女）らを惹きつけるために、魅力的な待遇のほか、優れた研究環境、終身雇用、高水準のクオリティ・オブ・ライフを提供することが要請される。つまり第三章で述べたように、海外から優秀な人材を誘致するための政策は重要である一方、より好ましい就労条件や環境、魅力的なポストを用意することが、中国人高度人材の越境の動機づけとして大きな影響を持つ。

キャリア追求がそうであるように、家族形成も、人の越境とは決して切り離すことができない。国境を越える移動・移住と家族の形成はどのように結びつくのか。本研究の対象者である 20 代～30 代前半の中国人高度人材は、独身のものもいれば、結婚や出産まで、新しい家族を形成したものも少なくない。既婚者の家族形成には、留学先または中国で知り合い、結婚に至るケースがみられた。全体的な傾向をいうと、海外に滞在する期間が長いほど、海外で出会い、家族を形成する可能性が高い。一方、中国で結婚し、家族と共同生活を送るために国境を越えるケースもある。

本研究は、中国から海外への国際移動だけでなく、母国への帰国の意思決定にも、家族という要因が作用していることを明らかにしている。特に第五章および第六章では、帰国の意思決定に家族要因が作用していることも多く論じた。また、第四章で述べた配偶者・

恋人と一人っ子要因も家族の要因として分析できる。配偶者・恋人の進路先国は、中国人留学生本人の進路先と高い一致性がみられた。一人っ子という属性については、一人っ子ゆえに母国の家族のもとに戻る意思が強く働くという先行研究や通説と一致しない結果が得られているが、一人っ子に限らず、親孝行の意識や両親の近くに暮らしたいという気持ちが変わらない。中国人の若者は両親との強い繋がりが結婚後も維持されている。この「繋がり」は、第一章でも触れた移民ネットワーク理論で言及されてきたが、中国人高度人材を扱った本研究でも、母国からの移動のみならず、母国への帰国や還流のプロセスでも重要な要因として確認されている。

家族との繋がりと同様に、20 代～30 代前半のライフステージにいる中国人の若者、特に女性にとっては、仕事と家庭の両立、すなわちワーク・ライフ・バランスの問題も不可避的に抱えている。例えば、日本においては特に、女性の出産や子育てによるキャリアの継続は難しいとされている。子育ての初期段階では両親の力を借りやすく、キャリアを中断する必要がない中国に帰国した場合と比べ、両親が滞在できる期間に制限がある日本に滞在する中国人高度人材は、キャリア形成や子育てについて大きな制約を受けているのである。とはいえ、子どもいる世帯にとっては、子育てに便利な社会環境や生活の質が担保される点は、日本に滞在する魅力である。ここには、日本での定着と母国への帰国という選択肢の間での葛藤がうかがえる。先に越境する高度人材の多様性について述べたが、国境を越える留学生や高度人材にとって、国際的な移動や移住はキャリアや家族が関係するがゆえに、人生にとっての一大事であるという点は共通している。つまり、本研究の仮説であり、特に第四章から第六章において多く論じてきたように、キャリアの追求や家族の形成に少なからず影響を受け、同時に影響を及ぼすのが、国境を越える移動であり移住である。